

ハイデガー・フォーラム 第13回大会  
2018年9月16日(日) 早稲田大学 戸山キャンパス

ハイデガーとプラトンの対決  
納富信留(東京大学)

\*本稿は未完成で、発表当日に修正や補足を行う可能性があります

1、プラトン、ハイデガー、私たち：基本姿勢

ハイデガーはプラトンに向き合い、そこで徹底的な思索を展開した哲学者の一人である。彼が講義や著作でプラトンのイデア論や存在論を論じ、そこから示唆や問題を見出して自身の思索にしたことを、私たちはまず真剣に受け止めるべきである。プラトンやギリシア哲学の解釈については様々な学術的問題点が指摘されているが(誤訳、過度の語源解釈、強引な読解、無理解など)、それ以上に彼がプラトンの投げかけた哲学の問いに向き合って応答したことが重要である。プラトンに向けられる諸批判にも真剣に向き合うことが、プラトンと共に、哲学を遂行することである。

ハイデガーはプラトン以外にも多くの哲学者を議論の対象とし(カント、ニーチェ、フッサールら)、ギリシア哲学でもアリストテレスをより主題的に扱い、他方でアナクシマン드로ス、ヘラクレイトス、パルメニデスをより高く評価した。だが、とりわけ後期に批判の対象となるプラトンとの関係は、特別の意味を持つ<sup>1</sup>。

ハイデガーはプラトンを読み、そこで自ら哲学し、プラトンと対決する<sup>2</sup>。

「ここからまた、新たな問いのための地盤を、つまり真理をアレーテイアとするプラトンの本質規定が呼び起こす問いのための地盤を、我々は初めて獲得する。つまりプラトン自身との対決 die Auseinandersetzung mit Platon selbst、従って西洋の全伝承との対決のための地盤を獲得する。」(54:第5節末尾)

2、プラトンへの私の対決：考察基盤

ハイデガーのプラトンとの対決を受け止めるには、まず、私たち自身がプラトンと対決

---

<sup>1</sup> 渡部、40-41頁がまとめるように、ハイデガーのニーチェへの姿勢の変化はプラトン批判と並行する。プラトンとニーチェはハイデガーにとって一対であったのかもしれない。

<sup>2</sup> 「哲学的に問う者にとって、プラトンは十分すぎる程語っている」(邦訳119頁)。『真理の本質について』(全集34巻)の邦訳からの引用は以下、ページ数のみを記す。

し、その中でハイデガーと対決しなければならない。それなしでは、たんにハイデガーの内在的な解釈問題となってしまう。

英米分析的手法が主流の現代の古代哲学研究では、海外でも日本でもプラトンの「イデア論」はほとんど真面に理解されていない。その原因は研究者が依拠する 4 つの基盤にあると、私は考えている。

- ① 哲学観：哲学とは、体系的な理論的考察、世界観、学術機関で生産される学説
- ② 経験論：私たちがこの世界で見たり触れたりする、感覚・経験の対象のみが存在する（アリストテレスでは「この人間、この馬」など）
- ③ 近代認識論：思惟する「私 ego」は純粹で自己同一的な主体、そこから世界をとらえる主観（デカルトの「コギト」、カントの「統覚」、フッサールの「超越論的主観」など）
- ④ イメージ論：イメージや比喻は実在に対して、貧弱な内実、劣った説明手段に過ぎない

これらの前提の上で、アリストテレス以来の批判、つまり、イデア論が余剰な存在を現実追加する空論、あるいは誤った形而上学であるとする偏見が定着している<sup>3</sup>。世界を認識し経験する「私」が固定的視点でありつづけ、今見え経験する世界が全てだとしたら、イデアはたしかに余剰であり、それを考えることは誤謬である。これに対抗して、私は本来のプラトン哲学を示そうと努めている。

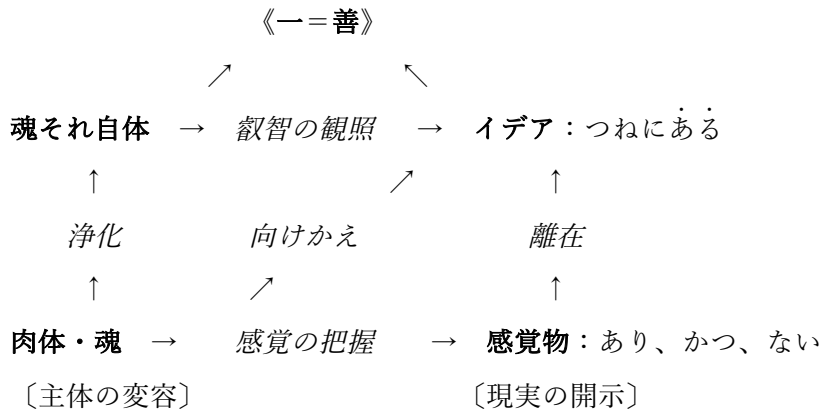
- ③ 主体の変容：私は固定的で自己同一的な主体ではなく、訓練をつうじて認識・存在において変容する（近代哲学でも、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガーらは「変容」を扱う）
- ② 現実の開示：私の変容に応じて、経験する世界も変容する。感覚で捉える世界とは別に、より根源的な地平が顕現する（この意味で「二元論、心身分離」は哲学の始点である）  
〔これら二つが合わさったものが「超越」と呼ばれる体験である〕
- ④ イメージの豊かさ：実在と像の関係を固定的な階層で捉えるのではなく、像により現実性があるという逆転、移相を認める（坂部恵、井筒俊彦など、東洋の伝統）
- ① 生きる実践としての哲学：イデアを論じることは体系的理論や教説ではなく、その実践で私自身が変わっていくあり方。哲学とは、私が生きること（アドーの古代哲学論）<sup>4</sup>

---

<sup>3</sup> 例えば、ファインは次のような問いを発する：‘Are there universals, independently of sensible objects?’; ‘If, as Aristotle and I believe, forms are universals, then to say that they are separate is to say they can exist uninstantiated by sensible particulars’. (Gail Fine, ‘Separation’, in *Plato on Knowledge and Forms*, Oxford University Press, 2003, p.32; originally in *OSAP* 2 (1984))

<sup>4</sup> ハイデガーの「哲学」観（124）と比べよ。

【超越の体験】<sup>5</sup>



私が見るところ、『存在と時間』などでのハイデガーの関心は、この理解に多くの側面で呼応する。

- \* 非本来的なあり方（頹落）から本来的なあり方への変容
- \* 存在論的差異（多様な現れ、アイデア、善のアイデア）<sup>6</sup>
- \* さまざまな配慮、構えの分析など

ハイデガーとプラトンの近似性（あるいは影響）を意識しつつ、両者の対決を見極めたい。

3、プラトンへのハイデガーの対決：「洞窟の比喩」をめぐる3つの問い

ハイデガーはプラトンの何に応答するのか。焦点は「真理」に向けられる。ハイデガーが『ポリテイア』の「洞窟の比喩」を丹念に読み解きながら、自身の「真理」の思索と対決させた1931/32年冬学期のフライブルク講義を、基本テキストとして検討する<sup>7</sup>。

<sup>5</sup> 納富『プラトンとの哲学』第三章参照。この図は『パイドン』のアイデア論を展開したものだが、頂点に「一＝善」を加えたのはプロティノスへの展開を睨んでのことである。

<sup>6</sup> 細川亮一の一連の研究を参照。『存在と時間』の基礎的存在論は「存在の意味への問い」が「プラトンのアイデア論の問題圏の内を動いている」（細川2、23頁）；「存在者・存在・存在の意味」という三つの次元は「現われ・アイデア・善のアイデア」に正確に対応する（細川2、25頁）。『存在と時間』は「存在の意味への問い」を問うことにおいて、プラトンの「存在の問い」（善のアイデア）の取り返しである。しかし、それは同時に『存在と時間』がアイデア論の軌のもとにあることを意味しているのである。（細川1、228頁）

<sup>7</sup> 本発表では1940年に公刊した論文「真性についてのプラトンの教説」とこの講義との相違は扱わない。渡部が詳細に論じているように、後年に明瞭となる批判は当初の講義では強調されていない。私はやや定型化した後年の批判には興味ない。ハイデガーがプラトンのテキストに向き合った現場で何が生じたかが重要である。

### (1) 「洞窟の比喩」への注目

まず、なぜ「洞窟の比喩」なのか<sup>8</sup>。ハイデガーはこの比喩を「完全に自立できる」として、対話内部で比喩が置かれた連関は「故意に顧みられない」との方針を提示する(17)。文脈から切り離しても内実の理解は「少しも傷つけ狭めることなし」に為されうると断言するが、それはプラトン対話篇の読解において危険であり、基本的に誤りである。実際、ハイデガー自身が「太陽の比喩」への連関に遡ることになるが(54, 103ff.)、対話篇の文脈に即した仕方ではない。

第6巻末から第7巻始め(巻分けは古代からの慣習であるが、プラトンの意図ではない)につづけて語られる「太陽の比喩、線分の比喩、洞窟の比喩」は3つ組であり、その連関において意味を持つ。この箇所については、「線分の比喩」がしばしば論じられる以外、専門研究者はこの主題を避ける傾向にあり、種々の勝手な解釈が散見される他、芳しい成果は出ていない。その中で、もっとも比喩らしい比喩「洞窟」を丁寧かつ哲学的に読み解くハイデガーの試みは、低調な専門研究との対比できわめて魅力的であり、解釈として十分に評価される。何と言っても、これらの比喩はプラトン哲学の頂点であり、プラトンが後世に残したもっとも問題含みのテキストである。これにどう向き合うかは、すべての哲学者(とりわけ西洋哲学の伝統の上にある者)に求められる課題である。この点でまず、ハイデガーのチャレンジに敬意を表したい。

3つの比喩は、哲人統治者の教育において、学びの対象として提示された「善のアイデア」を説明するためのもので、ソクラテスはそれが「何であるか、を知らない」がゆえに、比喩=像(εἰκόνας)で語るという。最初から比喩が3つ語られるとは明示されず、最初に「善の息子」として語られた「太陽」の比喩に続いて、語り残したこととして「線分」が語られ、さらに「洞窟」が語られる。3つの比喩の関係は専門研究のテーマとなっているが、3者は部分ごとに完全に重なる形で対応するのではなく、むしろ別の語り口で、異なった方向から照らし出す移行が意図されている。「太陽：善のアイデア」を類比で示す太陽の比喩は、基本構造を直裁的に示すが、スタティックな提示である。それにつづく「線分」も4分割された線分の関係を示すが、可視(下)から可知(上)へと類比的に上昇する、認識と対象の関係的なあり方の提示となる。「洞窟」はその区分を踏まえた似像において、「向け変え、上昇、慣れ、下降」といった動きを主題とするダイナミックな比喩である。対比から運動へとという動きが3つの比喩の連関であり、「洞窟」は最初の2者を踏まえずには理解できない。

ハイデガーが注目するように「洞窟」は「私たち人間の教育と無教育」を示す意図で提示

---

<sup>8</sup> ハイデガーが「洞窟の比喩」をくり返し取り上げたことは、渡部、42頁注1参照。

されるが、最初の2つの比喩に「人間」は登場しない。さらに対話の主題である「哲学＝政治」という側面も「洞窟」、とりわけ第4段階で初めて登場する。3つの比喩のこういった連関と位置づけを把握することは、解釈の基盤となる。故意に「洞窟」だけを切り離して扱うハイデガーの視点は、これらの連関を失うことで解釈に偏りを生じさせているのではないか。(ただし、これはハイデガーに限った失敗ではない)

「洞窟の比喩」の読解でハイデガーが提起する「問い」は3つあると捉えて、その問いへの対応から検討を加えよう。それは「真理とは何か、人間とは何か、善とは何か」である。

## (2) 「真理とは何か」

ハイデガーは「洞窟の比喩」に「真理 ἀλήθεια」の本質が示されていると解する。その語はその範囲に3箇所しか登場しないとはいえ<sup>9</sup>、特定の焦点でテキストを読み込むことは解釈学で認められており、作業仮説として有効である。(つまり、このテキストを「アレーテイア論」として読むことは可能だと、私は考える)。

だが、ハイデガーが「アレーテイア」というギリシア語の語源から読み解こうとした「欠如」としての真理、つまり「非秘蔵性 Unverborgenheit」という意味は、プラトンにあるのか。(この「真理」理解が正しいかは別として、ハイデガーの提案に寄り沿うと、どこまで行けるのか)。私なら、プラトンが「忘却」を語る『パイドン』篇「想起説」からヒントを得るだろう。不死の魂は生前に持っていた知識を、この世に生まれる折に喪失する(75e, 76d)、つまり「忘れてしまう」(ἐπιλήθω, 75d, cf. 76a)。この「忘却」(λήθη, 75d)からの取り戻し(ἀναλαμβάνειν, 75e)が「想起＝学び」である。それは、肉体と結合して生まれる「人間」だけが関わるあり方である。他方で、浄化された魂が関わる純粹なものは「真理」と呼ばれ(67b)、浄めという切り離し過程を「欠如・否定」と見ることは可能であろう。そんな魂が天上で観想するのは「真理の沃野」(τὸ ἀληθείας πεδῖον, 248b)である。「もし私たちに、あるものどもの真理が ἡ ἀλήθεια τῶν ὄντων つねに魂のうちにあるのなら、魂は不死だということになる」(『メノン』86b)。忘却から真理を開示していく想起は、十分にハイデガー的な「非秘蔵性」としての「アレーテイア」に関わる。

他方で、プラトンは「真理」を概念として論じてはおらず、「真理とは何か」という問いも立てない<sup>10</sup>。したがって「真理の本質・あり方」への問いもそれ自体では存在しない。だ

<sup>9</sup> 517a6 までに限れば、515c2, d7, 516a3 の3箇所、ハイデガーは丁寧に扱っている。

<sup>10</sup> ハイデガーは「真理とは何か Was ist Wahrheit?」という問いから「本質 Wesen」を論ずる(3)。「補遺」では、「我々の真理追求がそのその上でなされる根拠と地盤が、動揺に陥る。真理の本質は変容するだろう。」(345-6)と語られる。プラトンにこの問いはないが、後世の偽作『定義集』63には「真理。肯定と否定における情態、真なるものの知識」とある(413c)。

が、プラトンにおいて「真理」は重要な問題であり、問うに値する。それはけっして「言表と事実の一致」で尽くされるものではない。他方で、現代分析系の真理論のように、単に形式的なもの（タルスキー）でも、余剰なもの（デフレ理論）でもない。「美 κάλλος・均整 συμμετρία・真理 ἀλήθεια」は「善」を捉える3つ組とされる（『ピレボス』65a）。プラトンが「～とは何か τί ἐστιν;」というソクラテス定番の問いを「真理」に向けていないこと、「真理のあり方・本質 Wesen」をテーマにしていないことは偶然ではなく、「真理」がそのような問いや考察の対象ではないことを示唆するのではないか。プラトンは、それが適切な問い方だと考えていなかったのかもしれない。それは、探求において何を意味するのだろうか。

### （3）「人間とは何か」

ハイデガーが「洞窟の比喩」を取り上げた鍵は、「人間」にある。先立つ「太陽、線分」はとくに人間を登場させなかったが、「洞窟」の冒頭でソクラテスは「教育と無教育に関して、私たちの本性」を喩えると明言する（514a2）。そして、分析を開始する第1段階第1行から「人間たち」が描かれていく（514a3）。ハイデガーの考察は、ここに焦点を合わせる。「人間とは誰であるかを、誰が一体我々に言うのか？」（8）という序論の問いは、私たちの思いを揺り動かす。私たちは「人間とは何か」を自明だと思い、それを言う人など問うことはないからである。問いの鋭さが際立つ。

ハイデガーはそれに対して、第1・第2段階で「人間であること」を「非秘蔵性の内にたつこと／秘蔵性の内にたつこと」（30-31）という仕方で分析する。影と現実的なものの区別を遂行することが、「人間で-あること、実存すること」である（43）。考察はさらに深まる。

「人間に生起すると言うが、人間とは誰か Wer ist das?。人間とは我々自身であり、我々のみなのである。人間とは各人自身である。各人は今有る限り、即ちプラトンによってこの比喩の前に置かれ、そしてこの生起 Geschehnis の前に置かれている限りの各人自身である。」（53）

自らのあり方を問うもの（問うべく立たされている者）としての現存在、というハイデガーの基本が、「洞窟」というテキストを前にし、プラトンに問われてそれに応じ答えようとする限りでの私自身＝魂、そこにおいて人間が成立することを示す。ハイデガーはこの文を語ることで「洞窟の比喩」にそのことを語らせる。対話篇を読む者を問いに晒し、そこで対話において哲学を遂行させるプラトンの哲学が、見事に遂行されている。

「洞窟」は真理の比喩として「人間とは何か」を明らかにする。だが、これはプラトンの問いであろうか。プラトンはこの問いを、どの対話篇でも問うていない。また「人間」のイ

デアを語ることもない<sup>11</sup>。生きた人間におけるイデア的なものは「魂」であるが（『パイドン』最終論証）、彼は「人間」というイデアに与るのではない。それは、プラトン哲学において、魂が別種の肉体と結びつくことで、種々の動物に転生することから明らかである<sup>12</sup>。したがって、プラトンにとって「人間とは何か」は、イデアとして問われる問題ではない。他方で「魂とは何か」は別の問いである。だが、魂は人間だけでなく動物やあらゆる生き物が宿すものであり、宇宙の魂も考えられている（『ティマイオス』第1部）。「人間とは何か」はプラトンにとって究極の問いではなく、近現代哲学が一層引き受けた問題であった。

#### （4）「善とは何か」

「洞窟の比喩」が先立つ2つの比喩と合わせて示すのは「善そのもの」である。そこでは洞窟外の世界を照らす「太陽」がその善のイデアにあたる。その内実をハイデガーはこの比喩の解釈の内では扱わず、一旦「太陽の比喩」に戻ることで解明しようとする（54, 103以降）。

その導入部でソクラテスは、「善とは何かを知らない」と明言する（505a, 506c-e）。この出発点を無視してはならない。それが何かを知らないというソクラテス（私はその「不知の自覚」を謙遜や韜晦ではなく、文字通りに受け取る）が、やむを得なく「比喩」で語ったものを、私たちはどう語ることができるのか。この問いを考える必要がある。

ハイデガーの「善そのもの」の扱いには不十分な点が3つあり、それが彼のプラトン批判の成否にも関わるように思われる。

① 「善のイデア」も「イデア」（あるいは「イデアのイデア」）である限り「見る」対象であるという論点は、プラトンの比喩から読み取れないことはないが、「太陽を直接見ることができない」という『パイドン』の「言葉のなかでの探求」（99d-e）を合わせて読む時（そこは明らかに呼応する）、善のイデアを他のイデアと同様に、「見る」対象と位置づけることは慎重でなければならない。この点でハイデガーの扱いは平板で、紋切り型である。

② 善そのものが「あるの彼方 *ἐπέκεινα τῆς οὐσίας*」（509b）という決定的に重要な一節（とりわけ、新プラトン主義はこの言葉の上で展開される）をハイデガーは重視するが、「ある

---

<sup>11</sup> 後期の対話篇『ピレボス』15aでだけ「人間」がイデアのように扱われるとされるが、私はそう解釈しない。

<sup>12</sup> 『ティマイオス』や『ポリテイア』第10巻「エルのミュートス」参照。生物の「種 *εἶδος*」ごとにあり方を固定して捉えるアリストテレスと対照的である。アリストテレスは「人間のイデア」を語り批判するが、プラトン自身に由来するとは考えにくい。プラトンにとって（ニーチェをもじると）、人間とは克服されるべき或るものだったのである。

を超える」とされる善のアイデアの「あり方」をさらに問うてしまう (107)<sup>13</sup>。これは、なにかおかしいのではないか。

③ 「太陽の比喩」は、「洞窟の比喩」に増して「真理」を明示的に語っている。魂の目が、「真理とあるが照り輝く<sup>14</sup>場所に据えられる時、魂は知性 *νοῦς* で捉え、それを認識し、知性を持つものとして現れる」(508d) という決定的に重要な箇所を、ハイデガーはなぜか無視している。

「洞窟の比喩」の解釈を補うものとして持ち出された「太陽の比喩」の読解には問題があり、これらの箇所ですらプラトンにおける「根本体験の消失」(130) を読み取ることは難しい。善のアイデアが見られるということから真理がアイデア論の軛の元にある (1940 年論文、286, 290) と結論するハイデガーの勇み足は、「善そのものとは何か」という問いをあまりに安易に扱ったから生じたのではないか。ソクラテスが「私は知らない」と表明し語りだした「比喩」を、「善そのものを知る」という仕方で解釈したがゆえに生じた不首尾ではなかったか。

#### (5) プラトンとのズレ

以上の分析から、ハイデガーの読解がプラトンからどうずれているかが明らかになる。ハイデガーが正面に掲げた「真理とは何か=真理の本質」という問いを、プラトンは問わなかった。「人間」は「～とは何か」という問いや考察の対象ではなかった。そして「善とは何か」を語ること、示すことの根源的な困難、隠れてあること (あまりの明るみに)、プラトンは徹頭徹尾敏感に寄り添った。それは、結局「太陽」という直接目で見ることができない (視力を破壊する) ものを「比喩」において想起させる以外できないなにかであった。「アイデアは見られる」と言って済まされるほど安易なものではない。

だが、プラトンからずれているということは、それ自体では誤りにも批判の理由にもならない。哲学する者はそれぞれが自ら問いを立てる。ハイデガーがプラトンのテキストに向きあって問いを追求したことは、彼がプラトン自身の問いになんらか揺さぶられたこと以外ではない。私は、それが2人の対決 *Auseinandersetzung* の実相だと考える。

私たちはこんなハイデガーを簡単に批判したり無視したりできない (では、ハイデガーは

---

<sup>13</sup> アイデアを「最も有るもの」としつつ、「すべてのアイデアをさらに超えて可視的になり得る最高のアイデアが存在するならば、それは有 (既に最も有るものであるもの) を超えて、そして根源的な非秘蔵性 (非秘蔵性一般) を超えて在らねばならない。」(107)

<sup>14</sup> 通常他動詞で「照らす」と訳されるこの箇所の *καταλάμπειν* を、山本建郎の提案に従い、自動詞で訳す。



プラトンを簡単に批判したのだろうか？)。彼は、おそらくプラトン自身も応答しきれていないなにかの問いに向き合い、「真理」という言葉から切りこもうとしたのである。私たち自身が、彼らと共に、それに出会い、語る事が大切なのである。

#### 4、ハイデガー、プラトンを超えて：洞窟の内にあること

プラトンとハイデガーが歩調を共にする「洞窟から出る」根源体験としての「アレーテア」の哲学は、最終段階にも問題を残す。ハイデガーは第4段階（洞窟の内への帰還）に注目したが、その意義を完全には解明できていないように見えるからである。

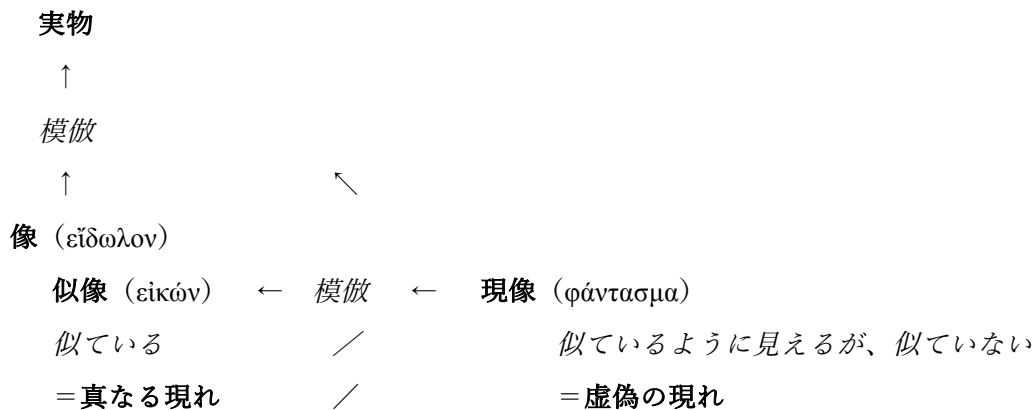
一方で、第4段階に至って初めて第1段階で語られたことが何だったのかが分かるという洞察は見事である。洞窟を出た者が哲学者として内に戻るように、私たち自身がそうして哲学者となることが期待されている。他方で、第4段階において戻った哲学者が何を為すのかは、一向に判明ではない。プラトンが一連の比喩を語ったのが「哲学者＝政治家」の誕生を示すためであった以上、そこで「政治＝洞窟の内にあること」が何なのか、が解明されなければならない。ハイデガーは、すくなくとも講義と論文でその点を論じていない。

洞窟の外を見た哲学者は内で何を為すのか、いや、そもそも「内にある」と知ることが可能かという問題に、プラトンは後期『ソフィスト』篇で向き合った。それは、ソフィストを定義する過程で発生した、ソフィストからの反撃に応じて示すべき課題であった<sup>15</sup>。ソフィストを「虚偽を語り、像を作り為す者」と規定しようとする試みに対して、ソフィストは「虚偽は存在せず、すべては真である」、また「すべてあるものは実物であり、像は無である」と反論する。この反撃に対決するには、「現れの真偽分別」を哲学の実践として遂行しなければならない。「洞窟の比喩」で言えばこうなる。「洞窟の内にあるものもすべて実際にあるのだから、実物である。もし「外部」とやらにあるものだけが実物なら、内部は無に過ぎない」。これに対して、哲学をソフィストから守ろうとする探求者は、最終的に次のような「像」における真偽区別（似像／現像）を為さなければならない。

---

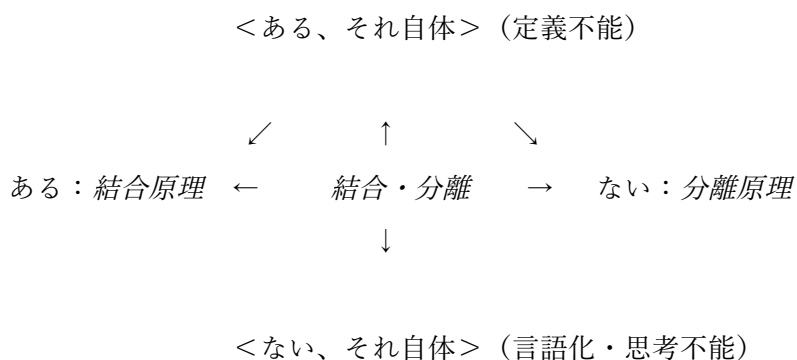
<sup>15</sup> 納富『ソフィストと哲学者の間』参照。

### 【現れの真偽分別】



だが、この分割もソフィストの反撃を免れず、さらに根源的な探求を要請する。もし実物を見ることができない場合、どのように実物と像を区別し、その区別に基づく二種の像を区別できるのか。この問いへの応答の探求が、「ある／ない」の結合と分離の解明となる。両者が適切に区別されつつ、結合する可能性が、像の存在と、その2種への区別を可能にするからである。「ある」はそれ自体では捉えることはできない（あまりの明るみ）。「ない」はそれ自体では語ることも考えることもできない（完全な暗闇）。だが、私たちは実際にこの世界で、すでに「ある、ない」を語っており、考えている。その言葉、思考において「真／偽」を峻別することが、哲学を可能にする。

### 【「ある」と「ない」の関係】



プラトンが『ソフィスト』で向き合ったのは、いわば洞窟の内にあるとされる私たちの言葉やあり方が、どのように洞窟の内で区別されるのかという問題であったと考える。これが、私たちが生きるこの世界で、政治はどう可能かを切り開く道でもあった（『ポリテュコ

ス』と『ソフィスト』との関係) 16。

では、ハイデガーは、洞窟の内にある哲学者が為すべきことをどう考えたのか。そこに哲学と政治をめぐる暗い問題があるように思われる。また、ハイデガーによる後年のプラトン批判も、どこかその問題に関わっているように思われる<sup>17</sup>。

#### 【参考文献】

ハイデッガー『真理の本質について』、ハイデッガー全集第34巻、細川亮一、イーリス・ブフハイム訳、創文社、1995年

ハイデッガー『道標』、ハイデッガー全集第9巻、辻村公一、ハルトムート・ブフナー訳、創文社、1985年 [「真性についてのプラトンの教説」所収]

マリティン・ハイデッガー『真理の本質について、プラトンの真理論』木場深定訳、ハイデッガー選集11、理想社、1961年

小島和男「プラトン 豊かな暗闇」、『続・ハイデガー読本』、法政大学出版局、2016年

納富信留『ソフィストと哲学者の間 —プラトン『ソフィスト』を読む—』、名古屋大学出版会 (2002年)

納富信留「イデアの超越 —魂の変容と現実の開示—」『思想』1097 (2015年9月号)

納富信留『プラトンとの哲学 —対話篇をよむ—』、岩波新書、2015年

納富信留「プラトン「太陽」の比喩」、山内志朗編『光の形而上学 —知ることの根源を辿って—』、慶應義塾大学出版会 (2018年)

Noburu Notomi, “Reconsidering the Relations between the Statesman, the Philosopher, and the Sophist”, *Plato’s Statesman: Dialectic, Myth, and Politics*, John Sallis ed., SUNY Press, 2017

古荘真敬「形而上学の根源をめぐる —ハイデガーのプラトン解釈の側面—」、『理想』686 「プラトンの「国家」論」、理想社、2011年

細川亮一1『意味・真理・場所 —ハイデガーの思惟の道—』、創文社、1992年。

細川亮一2「プラトン —西洋存在論の射程—」、大橋良介編『ハイデッガーを学ぶ人のために』、世界思想社、1994年、20-40頁。

渡部明「ハイデガーとプラトン —二つの「洞窟の比喩」解釈から—」、九州大学文学部『哲学年報』53 (1994年)、25-42頁。

---

<sup>16</sup> Cf. Notomi, “Reconsidering …”

<sup>17</sup> 古荘論文を参照。